

前夜

上

吉開那津子

新日本出版社

前夜 上

吉開那津子



新日本出版社

吉開 那津子（よしかい なつこ）

1940年5月 東京生まれ

日本民主主義文学同盟員

主な著書「旗」「葦の歌」「青春の肖像」（新日本出版社）

前 夜 上

1980年2月25日 初 版

1980年5月25日 第3刷

定価 1300円

著 者 吉 開 那 津 子

発 行 者 松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発 行 所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電 話 東京 (478) 3311

振替番号 東京 3-13681

印刷 壮光舎印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

前
夜
上

装
丁

永
井

潔

· 1 ·

びりびりと破るように目覚時計が鳴った。勢津子は反射的に腕を伸ばしてベルを押えた。もう夜明けか。だが、からだの芯には眠気がたゆたいた残っていた。昨夜は心して、少し早めに床に就いたのに。

ベルが鳴り出すより一瞬早く目を覚めていたのではないかと思う程、意識だけははっきりと、勢津子はいつもこの情容赦のない音を聞くのだった。この目覚時計のベルの音と共に始まる勢津子の明暮、もうどれ程の日数が流れたことだろう。勢津子のいまの日々は、目覚時計を離れてはとうてい考えられなかった。

まるでわたしら、喧嘩しながら離れられない夫婦のようだわ。使い古され、かすり傷さえ負っているそのひまわり色の目覚時計。勢津子は、西日本電軌に就職が決まった時、いまは広島叔父の家にいる母が、新しいチェックのスカートと白いブラウス、そしてこの目覚時計を買ってく

れた日のことを夢うつつに思い出した。そしていつか自分がその時の自分になっていた。この晴れやかな気持、これから働けるのだということのうれしさ。そう思ったとたんに勢津子はばつと意識を戻した。

いけない、また眠ってしまったところだった。勢津子は目覚めのあわいに夢を見ていたのだった。

ひろがった電灯の光の下で、室内はまだ夜だった。蒲団の外へ伸ばした腕を勢津子は胸元へひっこめた。起きたくなかった。この快いぬくもりを離したくなかった。圧倒されてしまいそうになる程切なくそう思った。からだの隅々の疲労が抜け切っていない。きょう一日、この蒲団の中でゆっくり寝ていられるとしたら、どんなにしあわせだろう。

風邪が悪化したからと会社に連絡して休暇をとろうか。そうだ、そうしよう。けれど、と勢津子はすぐ考えなおした。もし自分が休めば理恵が弥生子が呼び出されるだろう。もし、ふたりとも都合の悪い時には、B番でゆっくり寝ている誰かが起こされて、自分をうらみながら出ていくだろう。さもなくば、ワンマンのまま運行して、結局、車掌などいてもいなくてもいいということに、ますますなっていくだろう。

起きなければならぬ。足元にあるまだ熱いほどの湯タ

ソボを膝の辺に引き上げながら、勢津子はようやく氣をとりなおしていた。

この目覚めのひととき程、勢津子がバスの車掌を辞めたいと思う時はなかった。わたしはどうして八時半に出勤して、五時半に上がる仕事に就かなかったのだろう、などと思ひ切り悪く後悔などしながら。

蒲団からからだを起こした時は、時計が鳴って十分も過ぎていた。勢津子は目覚時計が鳴ってもすぐには起きられない自分をよく知っていたから、起床すべき時より、十五分程いつも早めに時計をセットしておいた。寢床の中で逡巡するのは、勢津子の起床に伴う儀式のようなものだった。実際、どうしても起きられなくて、休んでしまうことも、一年に一度か二度はあったけれど。

けれども蒲団の上からだが起き上がれば、まずその難関は突破できたのだった。迷いが吹っ切れると、勢津子の四肢は油を注がれた機械のように少しずつ敏捷さをとり戻していった。枕元にたんでおいたズボンに足を通す。石油コンロに点火してやかんをかける。床をあげて小さな電気炬燵をしつらえ、懷炉を肌着の間に結びつける。これだけのことを勢津子はたちまちのうちに終えてしまう。

まだ雪は降っているだろうか。カーテンを引き、ガラス戸の錠をとって、勢津子は雨戸の間から狭い庭とそれに続

く坂道の方へと目をやった。

赤煉瓦で不細工に囲んだ小さな花壇や、それに続く石段にも、一面に薄く積もったまま雪はやんでいった。低い街並をくろぐろと残したまま、港の方から董色の黎明が空全体に拡がろうとしていた。雪のために、いつものこの時刻よりずっとほの明るく、冷え込みがきつかった。きょうはきつと、よく晴れることだろう。勢津子は雨戸をくつた。やかんの湯が沸き始めて、ちりちりというかすかな音をたてた。

ことしの冬は、どういうわけか随分と雪が多かった。半島の先端にあって、海に突き出た恰好のこの町は強い風で聞こえていて、真冬の日々には、晴れていたかと思うと、たちまちの内に雲が拡がって、散る花びらのような雪が舞い落ちてきたりする。しかしそれも束の間で雪はすぐやんでしまい、淡い陽が照り始めたりした。この冬のように街中に十センチもの積雪が、しかも三度もあるというのは近年にないことだった。勢津子の乗務するバスは、たいてい郡部にはいるから、街中に薄い積雪のある時は、山間の道はチェーンをつけて徐行しなければならぬ。乗客のまばらな早朝のバスは凍てついた道を登る時、ナイフのようにとがって肌を突きさす透き間風を車掌に浴びせるのだった。今朝も、車はきつとガリガリに凍っているだろう。

しかし、もう二月もなかば、一番辛い時期は過ぎていくとしていた。

勢津子は沸いた湯で顔を洗う前に、昨夜食べ残した味噌汁をコンロにかけて、鶏卵を落とした。解きはぐした卵が半熟になるまで待って、冷飯をしゃくしに一乗せ加える。

起床したての勢津子には食欲がほとんどないのだが、御飯を柔らかく煮なおして、二口でも、三口でも必ず喉を通すようにしていた。空腹で出勤すると、乗務の途中で気分が悪くなった。それかといって、満腹に過ぎてもいけないかった。勢津子はまるで他人の所有物を借りてでもいるかのようになり、ちゅう、胃の調子を気にしていなければならなかった。

炬燵で食事をとる。ほうじ茶を飲む。その間十分もとれない。じーんという音が耳の底で鳴っていると思われる程静まりかえっている気配の中で、物音を高く響かせないように、頬と唇、それに手の甲と、念入りにコールドクリームをすりこんだ。薄く口紅を塗るくらいで勢津子は化粧はしなかった。けれども、朝夕、椿油で肩程までの長さに切り揃えてある髪の毛の手入れを怠ることはなかった。彼女は自分が美貌をもって生まれついでいないのを知っていたから、美しいとはめられることを期待したことは二十歳代の前半にすらなかったけれど、町を歩いていて手入れのゆ

きとどいた髪の毛を持った婦人に会うと、相手が若くうと先輩者であるうと、競争心を刺激された。きれいな髪とはめられるとうれしかったし、事実、勢津子はそのことを自負していた。

タイツの上にズボンを履き、足先には更に毛糸のソックスを重ねた。部屋を出る前にソックスをもう一足重ね、バックの中に、もしかの時の用意に余分の一足を持った。乗客の運び込む雪で、きょうのバスは一日中濡れているに違いなかった。

電灯のスイッチをひくと、夜が明けかけていて、雪に反射した朝の光が暗くなった窓辺に溢れた。ドアの錠をかけ、勢津子はしのび足で廊下へ出た。向かいの部屋はもうろんまだ寝静まっていた。

勢津子の向かいの部屋を借りているのは、市内の飲食店に働いている娘で、その店は彼女の伯母が経営しているということだった。減多に顔も合わせないのに、たまに廊下などで出会うと、自分のことばかりまくしたてた。

まだ二十歳になったばかりだというその娘は、自分がその気になれば将来は伯母の店を継ぐことが出来るのだなどという、勢津子に羨しがってもらいたがった。休日の外出や銭湯へいく時など、勢津子ならどんな勇氣を出しても着られないような奇抜な服を着たりして、近所に住むひと

を驚かせた。何年も同じ仕事を続け、店の経営のあれこれに通じて、彼女が女将として一人前になるのには、難関が多くありそうだった。

勢津子の借りている部屋の大家は、列車で二駅奥へはいった町にある工業高校の教師だった。親から残された家の玄関脇の六畳間と、昔は納戸のように使っていたらしい四畳の細長い部屋を改築して、両方とも若い娘に貸していた。部屋を貸すには女に限る、掃除は丁寧にするし、部屋は荒らさない、間代もきちんと納める、うちは男のひとに部屋を貸したことはありませんよ、とおかみさんは勢津子にそのことが自慢のようにいった。

廊下にかすかなきしみを残しながら、勢津子は玄関へ降りた。

明けてゆく戸外には、まだ誰も歩いた跡がない。勢津子は紺色の制服の上にオーバーをはおり、クリーム色のゴム長靴といういでたちで、ころばないように足先に力を集めながら新雪の坂道を降りていった。誰も歩かない新しい道をゆく。勢津子は自分の足元をみつめた。雪は彼女をこどものような心にした。

頭からすっぽりかぶっている濃い緑色のショールは、この冬のはじめ、広島の叔父の家の手伝いをしている母の房江が編んで送ってくれたものだった。娘の目にもそれはい

かにも素人が編んだ不体裁なものに見えた。こどもや孫に何かつくったり買ったりして送ってやれば、相手がどう思おうとそれだけで満足してしまう房江なのだ。いつも母の習癖をからかい半分で受け取っていた勢津子だが、こんな凍てつくような朝晩、そのごつごつと不細工に編まれたショールが、首筋や頬を外気からすっぽり守ってくれた。糸をたっぶり使って、小綺麗に編んでいないのがかえってよかった。それにもともと勢津子は自分のなり振りにあまり構う方ではなかった。

ゆるやかにうねる坂を下って、丘陵の裾をめぐる道路に出ると、ここではまだ闇の中だった。小型のトラックががしゃがしゃと騒いでいる牛乳瓶を積んで通っていった。夜陰の中に牛乳瓶のざわめきが消えかかる頃、いれちがいにクラクションを鳴らしてカローラが勢津子の傍を走り過ぎていった。あれは片山さんの車だ、と勢津子は思った。カローラはたちまち、すぐ先の角にはいつてしまった。今朝の車は、みんなチェーンを巻いて慎重に走っているけれど、車なら三分もすれば、会社に着いてしまうだろう。誰か、わたしを乗せていつてくれるひとの車は来ないかしらん。振り返ってみたけれど、街灯にもものうく照らし出された雪道に車の気配はもうなかった。

もし早朝の出勤や、深夜の帰宅に不都合があるのなら

ば、男子、女子にかぎらず宿直室の蚕棚に泊まることも出来た。しかし蚕棚は狭い上に不衛生で、勢津子たちは余程のことがないとそこに泊まらなかった。男子は自動車かモーターバイクで出勤する者が多かったし、女子は「お召しぐ」と呼ばれる早朝だけ市内を一巡する社員用のバスで出勤した。勢津子が会社の近くに下宿しているのも出勤の便のためだった。

勢津子は腕時計を街灯の光の方向にさらした。始業まで十三分だった。

勢津子は遅刻しない、ということだけでひたすら歩いた。淡く積もった雪が靴底で快い音をたてて砕け、執拗な冷たさがようやく、指先にはいのぼって来ていた。

タイムレコーダーを押して、詰所にとび込み、おはよう、と誰彼となく声をかける。若い同僚たちは、せわしく乗務の準備に追われながら、おはようございます、お姉さん、声を重ねて挨拶をかえして来た。

「お姉さん、伝言板に何かありますよ」

中央のストープを囲むベンチの上でソックスを履きかえていたひとりが勢津子の注意を伝言板へ促した。オーバーコートを脱ぎかけた勢津子はそのまま、ドアの横の伝言板

の前まで戻って見た。

「どうも、有難う」

大館さん、お婆さんから電話がありました、と確かに書き込まれていた。昨日、午後四時半の記入だった。昨日は勢津子は休暇だったのだ。義姉の良子から組合に伝言があったに相違ない。何用だろう。用がなければ、ご機嫌うかがいのためだけで、わざわざ電話などして来るはずもない良子だった。

ストープが点火されて間もないので、詰所の内はまだ充分に暖まっていない。けれどもその上の大きなやかんが湯気を吹き出す頃には、車掌たちも次々に出動して来て、外がどんなに冷えていても、小さな部屋は汗ばむ程熱くなる。勢津子は寒い外での仕事を終えて、この詰所に戻って来る時の、何ともいえぬほっとした気持が好きだった。だが、乗務に着く時は逆で、一分でも三十秒でも長くここにいたくなる。外へとび出してゆくにはちょっとした覚悟が必要だった。

勢津子はオーバーコートをハンガーに吊してから、ハンドバッグをロッカーに押し込み、制帽をかぶって鏡をのぞきながら、かたちを整えた。

「時枝ちゃん、何分の出」

「六時三十八分」

「ああ、小月行き二番ね」

「あの線は朝から乗り降りがきつうて」

「洋子ちゃん、ロザリオのウインドーに茶色っぽいコートあったの知らん」

「ああ、ちょっと見た」

「あれ、素敵と思わん」

「うん、そうねえ……」

乗務までの数分の余裕をストープに掌をかざして過ごしている娘たちをあとに、まだ誰も来ていない会計の窓口に並んでいる料金箱の中から、抜け目なく新しくてきれいなものを選んで、外へ走り出た。

詰所の会計係は本社直属なので、八時にならないと出勤して来ない。だから、午前番、つまりA番勤務の最初の乗務は、勢津子たちはいつも釣銭なしだった。夜明け早々のバスに乗るような客は、たいてい所定の乗車賃を用意している、そうしていなければしてもらいようにするのだ、というのが会社の良い分だった。

ご乗車の際には釣銭のいらぬよう硬貨をご用意下さい、すみません、まだ走り出したばかりで釣銭がないんですよ。両替をと、百円札を差し出す老人にそう断らねばならない時の面映さと申し訳のなさ。困惑の表情で俯く老人。車中の他の客に持ち合わせがあればいい方で、途中の停留

所のたばこ屋で小銭に崩してもらったりすることもしばしばだった。何しろ車掌も運転手も乗務の際には、一円硬貨一枚といえども私用の金を身に着けていてはならないというのが社則だったから。

さっき詰所にとび込んだ時は、まだ薄暗かったのに、もう一面に夜の雲はちぎれて、その狭間に二月の淡い金属的な空がのぞいていた。ストープの傍にいたためにからだが暖まっているからだろう、寒さもさほど感じられなかった。拡がってゆく光の中で、車庫の入口にかかげられている標語もはっきりと読めた。きょう、一日の無事を祈る、と。

社長が、自分の善意を示すつもりで、きょう、一日の無事故を祈る、と書いてかかげた看板であった。しかし故の字の辺を誰かが鈍器で打ちつけたので、ペンキがはがれ、ブリキが剥き出ていた。無事故は、無事と読め、かえって、毎日危険と接しながら仕事をしている交通労働者の姿を暗示していた。運転手や車掌たちは、この前を通りながら、「きょうも一日、命をながらえられて、めざたいのう」などと冗談をいって笑い合った。

車庫の入口の手前で、勢津子は思わず足を止めた。近くに置かれていた車はそろそろと注意深く動いて、一台、また一台と街へ出ていくが、給油所から向うにはまだぎっし

りと並んで出番を待っている。屋根の上に一樣に雪を乗せていた。修理工場の奥から急勾配でそそりたつ丘の上の民家の灯が、もう随分明るくなった朝霧の中にぼんやりまたいている。詰所が車庫より少し高い位置にあったから、ゆるやかに下りながら、勢津子はバスの屋根の上で、光を真正面に受けた雪の一点がびかりと長い光を放つのを見た。一步一步近付いていく毎に、あちらこちらで生きてでもいるようにびかり、びかりと光った。静まりかえった朝霧の中に、ゆったりと仕事へ出てゆくバス。操車係の振る赤い旗。こうした夜明けの光景は、もう見慣れたはずのものであったが、勢津子はいままた胸の内から新たに溢れるものを感じながら、雪の車庫の前に立っていた。

「おはよ、遅うなっちゃって」

「おす」
福家英三は、エアータンクが異常ないかどうかを点検している最中だった。勢津子は床下の物入れからすぐに踏み台と棒雑巾を取り出して窓ガラスをくもらせている水を落とし始めた。

「えらいじやろう。ええ加減にしちよけえや。こねえな日は誰も適当いや」

「でも、よその車は暖房がすぐはいるけえ、たちまち解けて乾く。福家さんのはこのままじゃお客さん冷蔵庫にはい

って来るようなもんじゃけえねえ」

「違うのう」

福家は屈託なく笑いながら、自分もライトの辺に凍っている雪を落としていた。すぐうしろの車に片山がチェーンを巻き終わって、福家と顔を合わせ、短いことばを交わしていた。片山の車は去年入れ替えたばかりのワンマンカーで、いかにも調子がよさそうだった。車内はきつと快く暖まっているのだらう。その窓にはもう雪の名残りもなかった。勢津子は表の雪をざっと落としておいてから、車内を掃き出した。

勢津子が研修を終えてはじめて乗務に就いた頃は、始発時ともなると、ずらりと並んだバスに車掌たちが一斉に蟬のように取り付いて、フロントガラスなどをごしごしと磨いていたものだ。車の清掃は車掌の仕事と内規で別に決められているわけでもないのに、それは長い間車掌の仕事とされていた。バスの中では、夫に対する妻のように車掌はいつも運転手につかえていなければならなかった。車を大切にする運転手たちの中には、車掌と一緒に掃除をする者もいるが、たいていは車掌の掃除の丁寧さ加減を比較したりして、五分でも十分でも早く出て来て車をよく手入れしてくれる車掌と乗務しがった。組合の婦人部では、この仕事を車掌の正規の仕事とは認めないとして、車の清掃管

理を担当する者を別途に雇用するように会社に要求したりもしたので。いまでは、勢津子がどんなに認めたくないと思っても車掌の乗る車は数少なくなる一方で、その要求も要求として成り立たない程だった。

制服制帽の車掌が揃ってバスを拭いている光景を、自分の車掌として働き始めた頃のことと重ねて勢津子が思い出しているところへ、チェーンを点検して福家が上がつて来た。

「久賀の奴、きのう車を自分とこまで持って来てしようたんてえや」

前の車が車体をずらせて、まもなく出の態勢にはいる。それに遅れず移動するために、バックミラーと前方に注意を分けて注ぎながら、福家がうしろにいる勢津子に突然そういった。

「え、何て」

福家が何をいつているのか、勢津子にはよく聞き取れなかった。

「久賀がのう、上がりの車を車庫まで持って来んで、途中で宮地さんを降ろしてそのまま自分とこまで運んでいってしまつたんてえや。宮地さんが電話で会社へ連絡して来たそいや、けさ詰所じゃその話でもちきりいや。例の胃痛に一日中いじめられたच्चゅうそいや。上がりの時は、も

う我慢ならんじやつたっていうちよるてえや。さっき、みっちゃんから電話で、きょうは休むて。奴、きょうはもう一度C番じゃろう。おかげでわしはきょうはACぶつ通しいや」

「へええ」

勢津子はことばを失った。いくら気分が悪かったからとはいえ、会社の車を自宅まで運んでしまうとは驚いたものである。

「思い切ったことをしてかしたもんいやのう」

嘆息まじりに福家はいった。

「で、車はどこ。まだ久賀さんとかなん」

「あとでちょっと取りにいつて来んにゃいけんじやろのう。また会社は横領だとか何とかいい出さんとも限らんし」

福家のことばに、勢津子の記憶の回線は頭の中を巡って、何かとてつもなく不愉快な思い出に結び付いていった。そうだ、菊村秋夫が解雇されたのも、バスを横領したという口実によってだった。あの時は、スト破りからバスを守ろうとしただけなのに。

「奴にしか出来んこといやのう」

福家は口元に曖昧な微笑を浮かべていた。福家もこの前代未聞の事件にあつてまごついているのだった。

「何かいうて来るんじゃないかしらん、会社は」

会社はこれを第一組合弾圧の好材料として利用して来るのに違いない。勢津子に直感されたのはそのことだった。

久賀逸馬は日本共産党西日本電軌細胞の細胞長であり、私鉄労連西日本電軌分会の職場委員でもあって、会社から最も目をつけられている内のひとりであった。そして久賀自身もそのことをよく承知しているはずだった。

「うむ」

意味の取れない唸り方をして福家はワイバアーの振動に目をやっていたが、

「本人もそのことを知らん訳じゃなし、余程のことじゃったんじやろ。胃痙攣でも起こしたんかのう。ともかくあいつは医者について徹底的に調べさせんにゃあいけん。しょっちゅう、具合が悪うなっちょるのに売薬か何かで誤魔化しちょるんじやけえのう。奴のロッカーを見てみい、胃薬の空箱や飲みのかした粉だらけじやけえ」

「みどりさんも、いいよっちゃった」

「それでも奴は男気を出すやろ。あれが奴のいいところでもあり、悪いところでもあるんいやのう。バスで家へ駆けつけんにゃないけん程えらかったら、その目朝から休んじょりやあええそに。そうやろが。つまらんとところで無理するけえ、こねえことになるいや」

ほんと肩の力を抜いて、それから頭の中にある何かを振り払うように、福家は首を左右に動かした。出庫まであと二分程あったが、車はもういつでも出られる態勢だった。「もっとも、わしは男気がたりんちゅうて批判されるけどの」

福家はいつて、ひとりで笑った。

「男気の足りん奴は、いつも尻ぬぐいをおおせつかるちゅうわけいや」

勢津子は黙って聞いていたが、福家が党活動にあまり積極的でないということ指して、そんな風な批判がなされているのを知らないわけではなかった。福家のことばの調子の中には、彼が自分では気がついていないらしい軽い皮肉がこめられていた。

「今夜、別所さんが、この間の報告会の慰労会をしてくれるちゅうけえ遊びにいこう思うちよったんじやが、それどころじゃあないみたいなのう」

「ああ、あの県民ホールでやった」

勢津子はぼんやりとあいづちを打った。福家英三は昨年秋、一ヵ月程会社を休んで、中国へいって来た。日中友好青年大交流の中国地方の代表としてだった。夏のはじめ頃から話がもち上がり、会社に長期休暇をもらう交渉やら、政府が簡単には渡航許可をおろさなかつたで、十月にな

ってやっと実現したものだ。といつても、福家は、それ程熱心な日中友好運動の活動家とはいえなかった。しかし、どういうわけか、日中友好協会市内支部連合会の理事長であり、日本共産党の地区委員会副委員長でもある別所豊堂に可愛いがられていて、今度の訪中の代表にも別所の強力な推薦があつて決定したのだった。

「福ちゃんは中国にいつて来れば、少しはしゃんとして帰って来るじやろう」

陰口とも冗談ともつかぬことをいい合つて、勢津子たちは福家を中国へ送り出した。長期休暇の要求闘争は分会を通じて行なわれたし、歓送会も分会が主催して行なわれた。勢津子には、福家がしゃんとなつて、つまりどこか變つて歸つて来た、という風には思えなかつたが、帰国するや否や中国の話をしにあらこちらへ呼ばれて多忙をきわめ、にわかに市の名士になつてしまったような感があつた。

「しかし、報告の演説も、わしはもう倦きたいや。これ位にして放免してくれんかのう」

いつもの福家の逃げ腰の姿勢でいった。

「何回ぐらいしたん」

「十八、九回はやつたじやろ。わしはもともと話し下手じやろ。はじめの内はひどいもんじやつたいや。しかし回を重ねる内にだんだん調子が分かつて来て、終いには我ながら

うまくなつたの。どねえなことを喋れば聴衆が喜ぶかちゅうことが分かつて来たけえの。しかしその分だけ、自分の本当の感動は薄れてしもうたみたいなのや。というよりも聴衆の期待に応えようとする態度が自分の内にいよいよ強うなつていくとのう、話のどこかに誇張が生まれてくるそいや。そんな風にいうたらい過ぎじや思ひながら喋ると、聴いちよる方はそんな話にわつと沸くそいや。そうすると、自分の喋っていることが、最初の自分の印象とずれてゆくような妙な氣持になるそいや」

「へえ、そんなもん」

そんなこともあるかもしれないと思ひながら勢津子はいつた。

「さ、三分の遅れじや」

福家はことばの調子を変えていった。操車係が旗を振っている。もうその緑色がはつきり見えた。

「発車オーライ」

「ま、別所さんとは是が非つちゅうこともないし、久賀の後始末が先決いや」

雪のまばゆさをいっばいに含んだ光が、車内を冷え冷えと満たし、チェーンの振動が次第に速度を増していった。

福家は車庫の門前に立っている操車係に掌で挨拶を送ると、営業所前停留所のあるロータリーの方へ、大きくカー

プをとってバスをすすめていった。

福家が簀子で靴の底にこびり付いた泥雪をおとして詰所の中にはいつてゆくと、

「福ちゃん、藤巻が待つちよったでえ」

いきなり声がかかった。

「どこへいったんか、あいつ」

声をかけてくれた山口は、ベンチの上で足の爪を切りながら藤巻の姿を捜し求めた。

「便所や、便所」

洗面所へ通じる戸口近くに立っていた中から、誰かがそう知らせてくれた。藤巻は久賀の相棒である。久賀が昨日のC番のあと、バスを車庫へ戻しておかなかったため、藤巻はきょうのA番を「お召し」に使う廃車寸前のガタガタで動めたはずだった。

福家が「座敷」の隅に腰をおろして、足の指のしもやけをさすっていると、藤巻は便所から帰って来て、福家の前に立った。

「福ちゃん、久賀さんとどこか教えてもらえんじやろか」

「ああ」

福家は思わず唸った。

「ずっとせんに一度いったことあったが、忘れてしもうて」

「いますぐいくんか」

「係長が、在庫証明を本部長のところまで届けえちゅうんで」

多くは喋ろうとしない藤巻だが、その女のようにやさしい表情には不快さをこらえている片意地がちらついていった。久賀がいらないから相棒の藤巻が呼び出され、何かいやがらせをいわれたに相違ない。藤巻は共産党員でも社会党員でもなかったが、第一組合に最後まで残ったひとりだったから。

「済まんのう」

ひそかに声をおとして福家は謝った。

「大将、大それたことをやってくれるけえのう。運転手のくせに車をいじめるっちゃ、まあ、ちょっと珍しいの」

藤巻は久賀が車を大切にしないのに、かねがね不満を抱いているらしかった。確かに、いくら手入れをよくして可愛いがっても、相棒にどうでもいいような扱われ方をしたのは、それが何年も続く毎日のことだから、うんざりしてしまふのも当然だった。

「もう一廻りして来たら上がるけえ、それからわしがいい」

て来てもええがのう」

「けど、福ちゃんはC番もやるんじやろう。ええわ、わしがいって来るけん」

「済まんのう」

福家は自分の失敗ではないのに、藤巻に対するうしろめたさから口癖のように繰り返して謝っている自分に気が付いた。

「お召しの具合はどねいやったかあ」

「どねいもこねいも、まるで牛をひっぱって一日歩いたようなもんいや」

藤巻のことは聞きつけて、周囲に立っていた男たちからひやかし半分の笑い声があがった。藤巻はしよげてしまい、福家が簡単にメモした地図をもつと、男たちの間をすり抜けるようにして出ていってしまった。詰所の中は何となく気まずく静まりかえってしまった。静まりかえった、と感じたのは福家の感じ過ぎかもしれない。けれど、そう感じてしまうと、福家は恥ずかしいような居心地の悪さ、先程、藤巻に対して感じたのと同じうしろめたさを覚えた。福家はさして広くもない詰所の中を見廻して誰か、この居心地の悪さを分かち合える者はいないかと捜したが、それらしい者は誰もいなかった。

詰所の隅が一段高くなっているこの四畳程の「座敷」で

少し眠ろうと福家は思った。福家は長年の交通労働者としての生活、共産黨員としての活動経験を通じて、どんなに騒々しいところで、横になれば忽ち、三分でも五分でも熟睡できる能力を身につけていた。

頭がぼんやりとして来ると、福家はよくここで仮眠をとった。五分で起きよう、十分で起きようと横になる前に決めると、その時間にかきり目が覚めるのには自分で自分に感動した。

「座敷」にからだを長く伸ばそうとしていると、すぐ手前のベンチでスポーツ新聞を読んでいた片山が、

「福ちゃん、どうかな。大将の様子は」

と、読んでいるものから目を離さずに聞いた。

「まだよう分からんのう。あとで合間を見て、ちょっといつて来よう思うちよるんじやがのう」

「PTAもえらいこっちゃのう」

誰か主の分らない声がとんで、その周囲がガラガラとわざとのように嗤った。福家は腹が立ったがこらえて横になった。

「これで第一組合の春闘も三割方後退やのう」

「なにしろ細胞長じゃけえのう」

そこでまた、ひやひやとする冷たい嘘いが漂った。そういつているのが誰なのか、福家の位置からはうかがい知る